

清流

題 字 : 芳野 充

令和7年7月30日

第103号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

正々堂々と生きる

ある休日、妻と朝九時ごろ平尾台の駐車場に車をとめて自然を満喫すべく出発しました。この日はとても天気が良く、空の青さと山の緑が本当にキレイで、また気候もさわやかな気持ちの良い平尾台を満喫できました。

駐車場にもどってきたのはお昼十二時すぎ。車のトランクをあけてリュックを下ろそうとしたそのとき、六十代と思われるご夫婦（Eさんと呼びます）がとっぜんかけ寄ってきました。何かと思った瞬間「申し訳ありません！車をぶつけて傷つけてしまいました」と申し訳ありません。何度か頭を下げます。いままでの楽しい気持ちが一瞬で急降下したのは言うまでもありません。接触して傷つけたといわれる場所をおそろおそろ確認してみると、正直どこが傷ついているのか分かりませんでした。あらためてよく見てみると、たしかにフロントバンパーの一部がこすれているのが確認できました。

これくらいなら目をつぶってやり過ごそうと思い、Eさんに「気にしなくても良いですよ」と伝えると、「それではこちらの気がおさまらないので、ぜひ修理させてほしい」と食い下がってきました。結局、Eさんの熱意におされ修理をお願いすることにしました。

やれやれと車に乗りこもうと思うと、運転席窓ガラス、フロントガラス、そして助手席窓ガラスの計三ヶ所にEさんからのメモ書きがはさまっていることに気づきました。メモ書きには「十時五分頃に車をぶつけてしまいました。フロントバンパーフォグランプ部分です。修理させて頂きたいのでご連絡下さい。大変申し訳ありませんでした」と連絡先と名前が書かれてありました。時計に目をやると十二時半過ぎ。つまりEさんご夫婦は、車をぶつけてから二時間以上も山のなかの駐車場でわたしを待っていたことになりました。その瞬間、胸にこみ上げてくるものを感じました。それは感動にもちかい感情でした。初夏とはいえ数時間も外で待つことはなかなか大変なことですし、ましてや相手はいっ戻ってくるか分からない状況です。

Eさんご夫婦の人柄を勝手ながら想像するに、小さなこともごまかさず、自分がされてイヤなことはひかえ、正々堂々と生きていきたい、と思ってい

る人ではないかと思いました。

この一件でわたしは、ごまかさない生き方、そして自分がされてイヤなこととはひかえ、自分がされてうれしいことを他の人にもしよう、と思っ

て行動することの大切さを改めて学んだ気がします。

日常のなかの小さな“ごまかさない”積み重ねの連続が、正々堂々と生きる人を作りだすのにちがいない、と修理されキレイになってもどってきた車を眺めながら、Eさんご夫婦とのご縁に感謝しました。

加来 寛

